



予の幼かりし時

S
Y
生

判然と僕の腦裏のうらに刻んでは居らないが四五歳の頃であつた。紅塵萬丈砂漠のやうな、東京にも春が來て墨堤には七重八重。櫻花は瀾漫として咲き亂れ春の女神の柔しい温い手に天地が抱かれた、時、各校のボートレースが例の如く舉行された浪をうつつ押しよする群集は雲霞の如く兩岸を埋めた各校の名譽を、六尺の身に背負ひ立つた。選手達は、丁度あの風は蕭々易水寒しと歌つた國士、あのやうな重任を負ひ、あのやうな悦びたまを幾分顔面にたゞよはしつボートに乗りうつつた。あゝこの時の光景、學友とこの溢るゝばかりの熱誠のコントラス、それは美しい且誠心の何とも言い難い表現であつた。やがてスタートは切られた。幾萬の群集の天地を震はす應援の聲。その驚天動地の光景も僅か一瞬の間であつた。須臾に雌雄決せられ悲喜交々、墨堤を埋め慰められつゝ勝を未來に期し去る敗殘の選手、意氣揚々、歡聲裏に凱旋將軍の如く去る選手。その光景はどんなに僕の心に映じたであらう。勝利の後の敗殘、敗殘の後の勝利、それだけであつた。一寸の悦び、僅かの悲哀、それに對してどうして悦び且喜んで居るのであらう。苦樂、それは輪廻して未來永々に亘るのだ誰が歌つたのか「古來萬事東流水」と。實際世の中は儘ならぬのだ。井底の蛙の如く、狭い中に沈み騒ぐ人間、世の中は眞に不思議なものだ。春逝き秋來り感じたその事は痛切に誤りならぬを感じた。未來は遠い。されど永久に滅せぬ眞理を幼時につかんだのだ。僕の幼時、それはあの深山の沼、そのやうに何等變化のない平凡なものであつたがこの事だけは未だに利器で彫りつけたやうに残つて年を経る度にひしと胸中を襲ふ。